

コラム

# みやちゃん と ご一緒体験記

Vol.22

## 【訪問介護（ヘルパー）の現場 ～地域住民を支援する底力～】

前回ではケアマネージャーとケアプランのことに触れましたが、今回は、訪問介護の現場において利用者の生活を支えるヘルパーの現状について書きたいと思います。

随分前の話（介護保険制度導入前）ですが、家族の一人が徘徊を伴う認知症（当時は「認知症」と呼ばなかった）を患い、自宅でのケアが大変になったためショートステイや老人病院などを利用して乗り切りました。とてもよくしていただきましたが、病院で家族を担当してくれたヘルパーさんから苦情がでてしまいました。よく聞くと、病院内をうろうろ歩きまわると転倒・骨折のリスクがあるためベッドに戻したりサロンに促したりしたそうですが、家族が言うことをきかない。仕事が多くかまっていられないため仕方なくそのヘルパーさんは、家族をベッドに縛り付けたそうです。

すると、驚いた家族が悲鳴をあげた、  
困ったためしぱりつけたヒモをゆるめたヘルパーさん、  
ここぞとばかりに応戦（パンチを2回ほど）した家族、  
悲鳴をあげたヘルパーさん、  
という展開だったとのこと。

普段から気丈な性格でしたため、他者から怒鳴られたり叱られたり（そのように感じてしまう）するとプライドが傷つき防御本能が働きつい手がでてしまったと、容易に察することができました。「いきなりぶたれて本当に痛かったです、以後こんなことがあると面倒みることはできません！」すごい剣幕で言われ苦い思いをしたことがあります。それ以来、私の中でヘルパーさんは怖い存在だという思い込みができてしまいました。

それから月日が流れ自分の親しい友人が会社員からヘルパーに転身し、忙しく働く様子を聞くようになりました。買い物をしたり料理を作ったり掃除をしたり、時には入浴介助もするのだと世話好き

な友人が話すのをきいているうちに、ちょうどその頃、家政婦さんが主人公のテレビドラマが話題になっていたこともあり、私の中では「家政婦さん」と「ヘルパーさん」ってどこが違うのだろう？という疑問が生まれたのは確か。

がん闘病中だった家族が受けた介護サービスは医療を伴うので、関わってくれたスタッフは、一度目はケアマネと訪問看護師、二度目はケアマネと訪問医師と看護師でした。利用者（家族）が望んだ在宅療養で通院する必要がないのが助かりましたが、その分自宅で何から何までやらなければならず介護する側としては手が足りず慣れるまでストレスフルでした。訪問看護師は医療者ですから、料理をつくって欲しいとか買い物してきて欲しいとかは頼むことはできません。その当時、家族に必要なのは医療は当然ですが毎日の食事（管理栄養士なみの）で重要なファクターだったのです。夢中でやっていたのですが、今にしても思うとヘルパーさんもケアプランにいれておけばよかったという思いがあります。

認知症を患っている田舎の母は現在、介護施設にお世話になっています。

■ 去年は夏からショートステイ（29日型）と自宅でのヘルパーケア（1日～2日）で施設があくのを待機しておりました。この時、服薬管理が深刻な問題でした。一人暮らしの認知症の母がきちんと薬（認知症の薬だけではない）をのむのを確認するのは至難の業でした。

電話で促しても、飲んだことを忘れていて二度のんでしまったこともあります。飲んだといいながら、ヘルパーさんに電話で確認したら飲んでいなかったことがわかりました。テレビカメラがついていれば現場中継ができて好都合ですが、アナログの母は携帯電話さえ操作できず不可能でした。

認知症患者さんにとってリスクな服薬管理。ショートステイ期間中、施設にいる時は管理してくれるスタッフがいますから問題ありません。自宅に戻っている時が問題なのです。そういうわけで、昼間はヘルパーさん、夜は現地在住の従姉妹がかけつけて、なんとか大事に至らずに過ごすことができました。

しかし、服薬管理をクリアできたと思っただのもつかの間、今年2月、認知症状が進んだ母は自宅に戻ってきた際にトイレの場所がわからず家の中をうろろろしていたら転倒し病院に緊急搬送されてしまいました。幾度電話をしても繋がらないため胸騒ぎがしておりましたところ、家の中に転倒したまま立ち上がれなかったそうです。

それを見つけてくれたのは、午前9時にくることになっていたヘルパーさんでした。前日自宅に戻った母の足の様子を見て、「だいぶ弱っている」と感じていて心配だから早めに来てくれたそうです。中に入りたくとも施錠してあるのではいけない。中から「大丈夫、もう少し、もう少しいい～」と小さな母の声がきこえたそうです。すぐにケアマネや現地在住の従姉妹に連絡をとり鍵を確保し病院に送ってくれました。

認知症と診断された昨年夏は「要支援2」だった母は、現在「要介護4」となりました。病院搬送時、外科ではいりましたが調子がおもわしくなく長いこと内科に移り紆余曲折がありましたが、現在は安定してきて老健で穏やかな日々を過ごしているようです。

本当に感謝しています！